十三

この家に住んでいるのは、マーサおばさんとおじさんのテオ、そして猫のモモ。

また、普段は離れた町に住んでいる娘のナーヤさんが、時々やって来た。

ナーヤさんは、絵を描く仕事をしている人らしかった。

モモの言うように確かにナーヤさんの車や服には、いつも油絵の具の匂いがした。

若犬が貰ったこの「クロフカ」という名前は、ミルクをくれたマーサおばさんがつけてくれたのだった。

マーサおばさんは小柄で陽気な人だった。

よく大きな鍋で具のいっぱい入ったスープをたくさん作っては、テオおじさんのところに仕事に来た人たちに振舞っていた。

庭の東側に彼女のお気に入りの菜園があり、そこでは香りのよいハーブやアスパラガス、ルバーブなどの野菜、そしてイチゴやスグリ、ラズベリー等の果樹が育てられ、生垣にはレモンの木が植えられていた。

マーサおばさんは、ここで採れた果物などでジャムを作ったり、野菜でピクルスを作った。

また彼女は、イチゴの収穫をするときは必ず、少し熟れすぎた実をいくらか枝に残しておいた。時折、遊びにやって来る野性のキジのつがいのために。

「クロフカ」と呼ばれるようになった若犬も、夜明けの薄明かりの中、この庭で「ヒェンヒェーン」と、鳴きながら飛び立つ美しい姿を何度か見たことがあった。

おじさんのテオは、家を建てる仕事をしている人だった。

ポーチで工房と棟続きになっている日当たりのよい小さな部屋がテオおじさんの仕事部屋だった。

テオおじさんは、そこでたくさんの線や文字や図の描かれている大きな紙をひろげては、そこにいる人たちにいつも何か指示をしていた。また、機械のような台に立てられた大きな板に大きな紙を挟んで、やはり機械のような大きなアームのついた定規で線を引いていた。

このポーチが若犬クロフカのお気に入りの場所となった。

テオおじさんの仕事部屋を後ろに控えて座り、此処に出入りする人たちを眺めるのが好きだった。

材木を運んだり、何やら大きな荷物を車から降ろしたり、別の車に積み込んだり……たくさんの人たちがしょっちゅう出入りしていた。

此処に来る人たちは誰もが皆、この黒くて大きな、そして近づくとすぐに隠れてしまう臆病なクロフカのことを話題にし、来る度に彼にいつも声を掛けてくれた。

それも、驚かさないように遠くから親しげに呼びかけ、決してやたらと近づいたりしないのだった。

「でかい犬だな……」

「この犬、でかいわりに臆病だよね」

「ああ、でも近寄ると行っちゃうんだ」

「毛がフカフカだね。夏は暑そうだな……」

「犬ぞり引くやつみたいだね」

「……狼顔だね……強そうだな……」

「うん、強そうだ……ちょっと見た感じが怖いよね」

クロフカは、頭や背中などは黒くて長い毛並みがフカフカして、黒犬の印象があるが、目の辺りや顎にかけての毛並みは、白と少し薄茶が混

じり、そして首からおなかにかけては、その白い毛がマフラーのようだった。

また太い四肢は白い毛でおおわれており、こちらもまるでブーツをはいているようだった。

特に吠えたり威嚇することもなく、庭などをあちこち歩き回ったり、モモと遊んだりして一日を過ごした。

クロフカは此処にいて幸せだった。殊にマーサおばさんが庭にいる時は、少し離れて彼女の姿が見える処でさりげなく自分の存在を知らせ、気づいてくれることに幸せを感じた。

此処では誰もクロフカをいじめる者はいなかった。

しかしそれでも彼の臆病さは変わらず、毎朝、工房の扉を開けるテオおじさんや、毎日餌をやるマーサおばさんでさえも、なかなか近くには寄れないほど用心深いのだった。

まして、たまにしか来ないナーヤさんにとっては、なつかない犬だった。

ナーヤさんは、この新しく家族の一員となった大きな黒い犬の気を引こうと、来る度に美味しそうな餌や犬が面白がりそうな玩具などいろいろなものを持ってきた。

そして、それらを庭のはずれや茂みの陰に隠れている犬に向かって

「クロフカぁ……クロフカぁ……」

と声を掛けた。

「だめだわ……ちっとも来ない……。こっち見てるんだけど距離が縮まらない……これ以上近づくと逃げちゃう……」

「そりゃあ、あんたはたまにしか来ないんですもの。犬だって用心してるわ……この人だれ？　なんてね……」

「ご飯は、母さんからもらってるんでしょ？」

「そうだけど、やっぱり居なくならないと……。人が見ている間はご飯

のところには来ないわね」

「そうなんだ……」

「それでもね、いつの間にか来て食べてるのよ……」

「ふぅーん」

「いつもね、クロフカぁ～って呼ぶとね、どっからか、姿を現すの……。たいていはポーチの段位寝そべってるんだけど……。すぐに隠れちゃう。あとは、材木の陰かガレージの裏あたりにいるみたいね。」

「ふうん、そうなの」

「それでね、ご飯の入ったボウルを見せると、近づかないで遠くからジッと見てるの。こっちがボウルを置くと、ようやく少し近づくんだけど……立ったままジッとして、それ以上は、なかなか……」

「用心深いのね……首輪してるから元は飼い犬だったでしょうに……」

「ほっぽられて、よほど苦労したんじゃないのかしらね……父さんもそう言ってたわ……つらい思いしたんでしょうね……」

「ふーん……こんなに大きくなって捨てるなんて……」

「よほど事情があったんでしょう」

「いくら事情があったからって、なにも捨てることないのに」

ナーヤさんは遠い眼をして黒い犬を眺めた。

「それもだけど、あの首輪が気になるわ。きつくないかしら……」

「お前もそう思う？　私もあの首輪、早く外してやりたいんだけど……」

マーサおばさんもテオおじさんもそしてナーヤさんも、新しい仲間が自分たちに馴れてくれるのを根気強く待った。

やがて、少しずつクロフカは、この家の人達にその姿を見せるようになり、あわてて隠れたり逃げなくなってきた。

食餌の時も、これまでは人間が見ている間は決してボウルに近寄らなかったが、今では離れていれば、餌を食べに来るようになった。

クロフカは、いつでも何かあったらすぐにその場を逃げられるように身構えた様子で、人の気配と視線を用心しながら、毎食マーサおばさんの作った餌を平らげた。

そしてだんだんとマーサおばさんの視線も気にせずにボウルに鼻を突っ込んで食べるようになっていった。

マーサおばさんは、いつでも少し離れて犬の食事の様子を眺めた。時には食べ終わるまで、じっと見ていることもあった。

テオおじさんも時折、仕事部屋の窓から静かに犬の食事風景を眺めるのだった。

つづく

掲載した作品の著作権は全て作家月之宮成子に属します